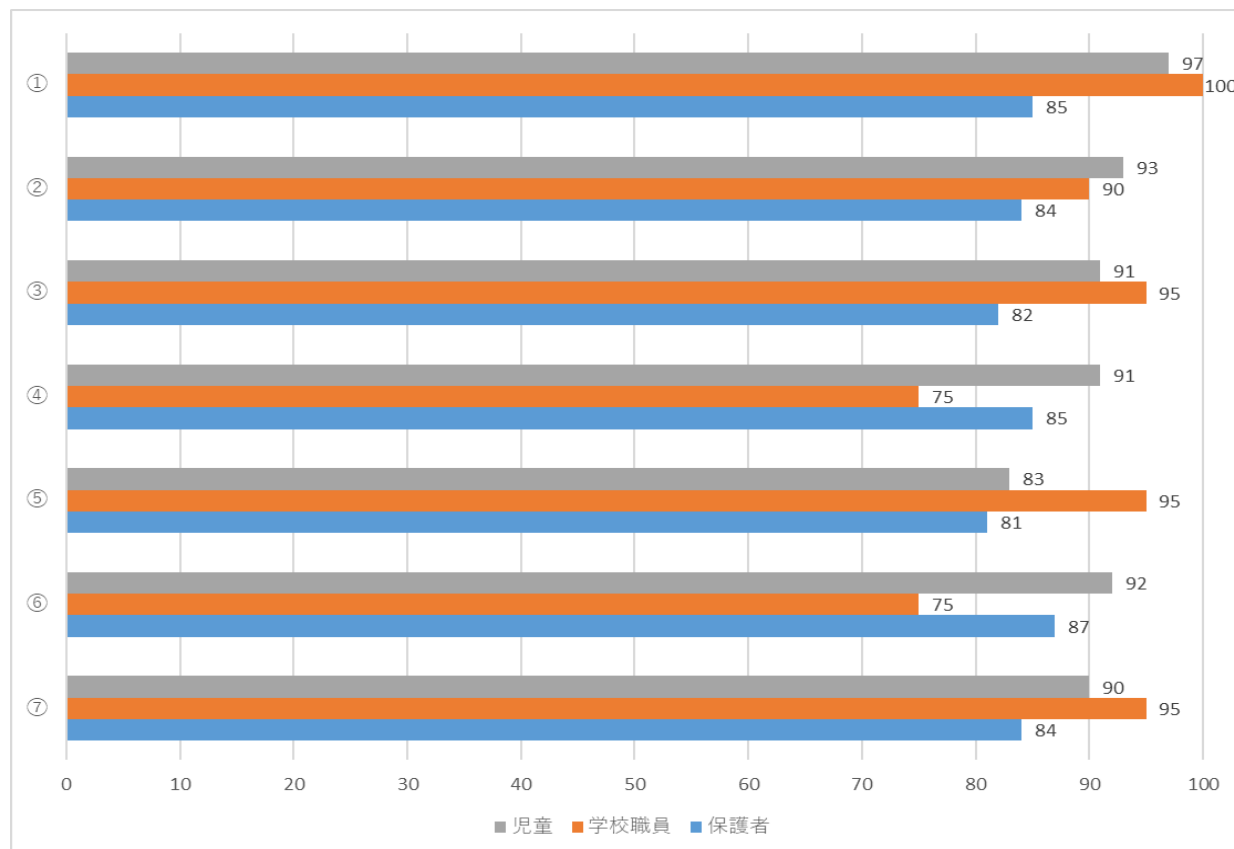


昨年末には、学校評価アンケートに御協力をいただき、ありがとうございます。集計結果が出ましたのでお知らせいたします。

学校教育目標 「夢に向かってともに伸びゆく子」
 目指す子供の姿 「『やりたいこと』を見つけて、挑戦する子」
 重点目標 「【知】知りたいがいっぱい」
 「【徳】思いやりがいっぱい」
 「【体】元気がいっぱい」

～学校評価アンケート結果（とてもそう思う、まあそう思う 合計）～



- ①「やりたいこと」を見つけて、挑戦している。
- ②学習の中で、やりたいことを見付け、進んで取り組んでいる。
- ③自分の伝えたいことを表現したり、相手の伝えたいことを理解したりしている。
- ④相手の顔を見て、挨拶や返事をしている。
- ⑤自分の良さを知り、相手の良さに目を向けている。
- ⑥落ち着いた生活をしている。
- ⑦健康な生活を送るための目標に向かって、あきらめないでとりくんでいる。

<考察>

本年度も「夢に向かってともに伸びゆく子」を育てるための具体的な取り組みを進めるにあたり児童、教職員、保護者や地域の方々で「『やりたいこと』を見つけて、挑戦する子」を目指す姿として共通理解し、教育活動を展開してきました。

まず子供たちが自信をもち登校することが楽しくなるように、主体的に活動できる場を設定してきました。特別活動の「ふたばっ子チャレンジタイム」「ふたばっ子発表会」では、まず、児童と教師が「何のためにその活動を行うのか」を考えました。次に「どんなクラスにしたいのか」「どんな姿を見せたいのか」を話し合い、そのために「どんなことをするか」を子供たちの

やりたいことの中から決めて挑戦しました。2年生の生活科では「双葉の地域博士になろう」を目標に、調べたい場所に何度も出向いて地域の方に質問し、双葉の人・ものに詳しくなりました。更にこの学習で分かったことを6年生が行った七夕イベントのようにみんなに伝えたいという思いが生まれ、当初は計画になかったことですが、全校児童に呼び掛けて発表会を行いました。6年生のキッズチャレンジビジネスでは、「浜松の伝統工芸品である遠州綿紬を多くの人に知ってもらいたい」という思いから「どうすれば伝わるか」「何を売るか」「何枚売るか」など、活動を進めるごとに表出する課題を解決するための話し合いを何度も行いました。そして地域の方に製品作成や販売準備などで御協力をいただき、遠鉄百貨店で販売活動をしました。また、本活動を他学年に繋げる取組も行いました。このようにやりたいことができる学校になってきたことで登校することが楽しくなり、昨年度に比べ、欠席者数、遅刻者数ともに減ることにつながったと考えます。

次に自分の思いを分かるように伝えたり、相手の思いを真剣に聴いたりすることへの意識を高め、他者への思いやりの育成につながるように、異学年、異学級種の交流を増やすことに努めてきました。本年度は新型コロナウイルス感染症が2類から5類に移行されたことで縦割り活動を増やしました。週1回のなかよし清掃、年3回のなかよし遊び、ふたばっ子チャレンジタイムでの運営委員会企画の縦割り種目など1～6年生がともに取り組む時間が増えたことで、上級生は下級生に対して優しく接し、下級生は上級生の言葉を素直に聞き入れ、相手を思いやり敬う姿が多く見られるようになりました。それは学年や学級の友達や仲間への言動にも認められました。

このように様々な教育活動が相互に関係し合い、良い相乗効果を生み出しました。そして個々の自信や他者への思いやりが心の安定に作用し、落ち着いた学校生活につながってきたと考えます。また、「見つめる力」「かかわる力」の伸長に重点を置いたキャリア教育の浸透や充実が図られることも子供たちの表れから確かめることができました。

<次年度への改善策>

【教育活動全体】

- 「何のために」行事や活動があるのかを子供が考えることからスタートとし、「どんなことをやりたいのか」を話し合い、実行する。

【知】知りたいがいっぱい

- ・本年度、総合的な学習や特別活動、生活科などで取り組んできた活動は子供主体の活動になっていた。そこで来年度は教科学習においても、「知りたい」「分かってほしい」という思いが「やってみよう」という主体的な思いにつながる授業づくりを目指す。
- ・児童、保護者、学校職員の三者が重点目標について共有する。また、ブログ等による発信を継続していき、教育活動の結果や成果だけでなくプロセスをアピールしていく。

【徳】思いやりがいっぱい

- ・ピアサポート、縦割り活動をより充実させる。そのためにピアサポートでは教師がどのような心構えで取り組めばよいかを理解する。縦割り活動では、今ある活動の中に仲良しグループでできるものはないかを考えていく。
- ・月に一回ある「こころの日」の内容を、子供の実態に合わせ吟味していく。また、多くの先生方が主体となって取り組んでいく。

【体】元気がいっぱい

- ・子供たちが主体となって学校のきまりについて考える。
- ・週1回は休み時間や昼休み、運動場に出て、身体を動かし、運動の習慣化を図る。

※本年度、重大事案に至ったいじめは見られませんでした。その理由は2点考えられます。1点目は本校が「思いやりいっぱい」を目指して日々の教育活動に取り組んできた結果だと捉えています。児童のアンケート結果（とてもそう思う、まあそう思うの合計）がほとんど90%を超えていることから、「やりたいことができる」「自分の考えを伝えられる」「落ち着いた生活を送ることができる」など、様々な課題解決を通して個々の学校生活への期待感や充実感が高まり、他者と協働する大切さや価値、意義に気づいたことが温かい集団づくりに寄与して、いじめが起こりにくい素地ができたのではないかと考えます。2点目は「学校いじめ防止基本方針」に基づき、「いじめの未然防止」「いじめの早期発見」「いじめへの対処」を全職員に徹底し、対応してきた結果ではないかと推測しています。常にアンテナを高くして児童を見取り、表情等の変化を見逃さず、良い表れと同様に気になる様子が認められれば「相談・連絡・報告」によって情報共有を確実にし、必要に応じて関係職員で対策を立て、迅速に且つ適切に対応することを意識してきました。今後も思いやりのある集団づくりを心掛け、教師と児童の良好な関係、教師同士の連携を大切にし、いじめにつながる言動を見逃さずに指導していきます。